

WGIP と歴史戦—日本人の道徳を取り戻す

（国士舘大学公開講演会、令和3年11月2日）

麗澤大学特別教授

モラロジー道徳教育財団道徳科学研究所教授

高橋 史朗

1 日本人の精神的劣化

- (1) 三島由紀夫『文化防衛論』…「豊かな音色が溢れないのは、断弦の時があったから」
- (2) 曾野綾子「日本人の美徳の崩れが恐ろしい」(産経新聞8月15日付「正論」)
「建築の強度偽装、自動車の燃費に関する虚偽の申告、歴史ある大手企業の粉飾決算など、日本人の誇りだった誠実と職人気質を失った姿を見ると、私はわが国の将来に暗澹たるものを見る。彼らは仕事の発注者や株主や消費者を騙しただけではない。日本という国を詐欺の容疑で売った新しい『売国奴』に等しいのである。」
- (3) ノンチック・元マレーシア上院議員の詩「日本人よ ありがとう」

2 ルース・ベネディクト『菊と刀』—米軍の対日心理戦略論文

（『日本人の行動パターン』に加筆）…山折哲雄の解説「アメリカの戦時情報局のために行った政策研究」「戦闘的な政治学の論文」「重心を低くして、ひそかに獲物に狙いを定めていた」「武士道道徳と天皇信仰にぴたりと照準を合わせていた」「文化人類学的粉飾の背後に隠された本来の意図」を見抜く必要がある⇒「国民性研究」は「敵の精神に打撃を与える無形の武器」

- (1) 第1章「研究課題・日本」…「日本軍と日本本土に向けたプロパガンダにおいて、私たちはどのようなことを言えば、アメリカ人の生命を救い、最後の一人まで徹底抗戦するという日本人の決意をくじくことができるだろうか」
- (2) 第3章「日本人の倫理体系の根底にあるカースト（階層制度）が『有史時代を一貫する生活原理』…「秩序と階層制度に対する彼らの信頼と、自由と平等に対する我々の信仰とは、まったく対極にある。正しい憤りをもって『階層制度』と戦う」
- ➡内なる基準に基づく欧米の「罪の文化」とは異質な外なる基準（他者の目）に基づく「恥の文化」が「日本人の国民性」、と単純な二分法論理で捉えた
- (3) 最終章「対日占領の意義」…「日本人の古くて危険な侵略的（攻撃的）性質の型を打破し、新しい目標に向かわせることである」
- ➡日本人の「病的特性」の根底にある「トイレット・トレーニング」（用便の厳しい躰）
- ➡神聖な布団を便で汚すことは最大の罪と見なされ、厳罰と厳しい躰が日本人の国民性の形成要因、不安感・恐怖感の精神的トラウマとなり、「集団的強迫神経症」となって「侵略的・攻撃的性質の型が形成された＝ジェフリー・ゴラーのトンデモ学説

3 ゴラー『日本人の性格構造とプロパガンダ』と太平洋問題調査会

- (1) ヴァッサー大学所蔵のベネディクト文章では、第3章「プロパガンダと日本人」が墨塗利されて削除されている➡ラインバーガーが立案した対日心理戦争計画「日本計画」の基本文献として活用➡ジョン・ダワー「戦時米国における日本人論の唯一最大の影響力のある学問的分析で、戦時情報局の対日ホワイト・プロパガンダのバイブル」と絶賛（『容赦なき戦争』2001）

- (2) 「日本人の性格構造分析会議」(太平洋問題調査会NY会議,1944,12,16-17)
- 日本兵の日記を回覧しながら、映画『チョコレートと兵隊』(1938)を上映
 - 日本人の「病的特性」「伝統的攻撃性」の根因はトイレット・トレーニング
 - 「危険な侵略的(攻撃的)性質の型」(『菊と刀』) ➡ 「南京大虐殺」「侵略戦争」
 - 日本人と米不良少年の性格構造の28項目の類似点
 - ジョン・エンブリー「トイレット・トレーニングへ飛躍したり、国際関係の現象へと飛躍するのは方法論的に無理があると考える者はわずかしかない」
 - デイビット・H・プライス「エンブリーは、日本の軍国主義のルーツは、関税規制と島国環境による天然資源不足にあるのであって、仮説とされるような内面的心理的欠陥によるものではないと考えたが、1950年,FBIによって不慮の事故を装って暗殺された(『人類学的知性』デューク大学出版)

4 対日心理作戦を継承した WGIP に至る歴史的経緯

- (1) OWI (戦時情報局)の対日心理作戦ハンドブックの冒頭…「プロパガンダとは、相手の考えや行動を支配するための手段であり、相手の思考過程に影響を与えるのみでなく、アイデアをその思考の中に微妙に巻き込んでしまう無形の戦略である」
- (2) 思想的・実践的源流…タヴィストック研究所と延安の「日本兵捕虜洗脳教育」
- ➡ジョン・エマーソン証言(1957,3,12米上院国内治安委員会)—英国立公文書館文書➡「軍国主義者」と「国民」という架空の対立図式を導入
- (3) ブラッドフォード・スミスの2論文「日本精神」「日本—美と獣」(コミンテルンの外郭団体「アメリカのシナ人友の会の機関誌『アメリジア(Amerasia)』1942」)

- (4) ボナー・フェラーズが招集したマニラ対日心理作戦会議（1945,5, 7～8）➡対日心理戦略を CIE に引き継ぐ
- (5) 米情報調査局（COI）から OSS・OWI に受け継がれた対日心理戦略は、国務省の戦後計画委員会（PWC）と国務・陸軍・海軍三省調整委員会（SWNCC）という対日占領政策の最高決定機関を経て、GHQ の CIE に継承され、WGIP として結実した
- (6) ハル国務長官の誤解「日本の軍国主義は国民の伝統に基づいているという点において、ドイツやイタリアとは異なる」…ホルトム・ゴラー・ベネディクトの影響
- (7) 「伊独での失敗の分析」報告書「積極的で統合されたプログラムの事前の準備の欠如」の教訓から「再教育・再方向付け」の積極的で統合されたプログラムの必要性が認識され、SWNCC の米国「初期の対日方針」に受け継がれ、「再教育、再方向付け」を狙う「精神的武装解除」構想の最重要政策として WGIP が策定された
- (8) フェラーズの対日基本心理作戦計画書(1945,4,12)の3つの「結論」「心理作戦の方法論」「日本人の行動パターン」「天皇崇拜」「武士道」記述
➡マッカーサー電報（1946,1,25）に決定的影響を与えた

5 「太平洋戦争史」と「南京大虐殺プロパガンダ」との接点

- (1) 「南京大虐殺プロパガンダ」の最大の根拠一マギーフィルムとティンパーリ編『戦争とは何か』
- (2) ティンパーリからホーンベック米国務次官宛書簡
- (3) ティンパーリからベイツ宛書簡（1938,2, 4）
- (4) ジョージ・フィッチ著『中国での八十年』
- (5) フィッチ婦人の米下院外交委員会証言（1939, 7）
- (6) ブラッドフォード・スミス「太平洋戦争史」への影響

6 戦後教育への影響

- (1) ミラン・クンデラ『笑いと忘却の書』(集英社文庫、2013)
- (2) 尾崎一雄『虫のいろいろ』(新潮文庫,1951) —「蚤の曲芸」
- (3) 「太平洋戦争史」…土台は米国務省「平和と戦争」…敵国が善玉悪玉史観で裁いた
- (4) 教師指導用マニュアル『新教育指針』(昭和21年5月)
- (5) 大阪書籍・日本書籍中学校歴史教科書の近代史の扉の写真
- (6) WGIP を継承・補完する日本学会議
- (7) WGIP 「陰謀史観」への反論

7 日本発の「歴史認識問題」…「反日」NGO と国連の癒着

- (1) 教科書誤報事件➡検定基準に「近隣諸国条項」➡日本青年会議所小学生調査
- (2) 首相の靖国神社参拝問題
- (3) 従軍慰安婦問題➡ユネスコ「世界の記憶」共同申請
- (4) 「こども庁」「子ども基本法」論議の問題点(拙稿「左翼政策『こども庁』実現めざすのか」『正論』令和3年12月号、参照)

8 「日本精神」の再評価

- (1) 神道(「鎮守の杜」文化)の再評価
 - ① 国連事務総長から石清水八幡宮権宮司が「SDGs文化推進委員長」就任を依頼された理由
 - ② 寛仁親王殿下記念講演(全国氏子青年協議会創立35周年、赤坂プリンスホテル)
- (2) 「武士道」の再評価—大森恵子『高校生が読んでいる『武士道』』(角川新書,2011)

- (3) 「皇道」の再評価一拙稿「日本の『国柱』を考える」(産経新聞「解答乱麻」2019,2, 6)
- ① 上皇后陛下の御歌一明治神宮御鎮座 80 年
 - ② 小山泰生『新天皇と日本人』海竜社,2018
 - ③ 五か条の御誓文
 - ④ 「新日本建設に関する詔書」…「朕ハ義命ノ存スル所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ万世ノ為ニ太平ヲ開カント欲ス」➡「時運ノ赴ク所」(関西師友協会『安岡正篤と終戦の証書』PHP 研究所)
 - ⑤ 「王政復古の大号令」
 - ⑥ 「神武天皇橿原建都の詔」
 - ⑦ 聖徳太子「17 条憲法」

9 ユネスコ「世界の記憶」登録をめぐる攻防と「歴史戦」の課題

- (1) 共同申請文書の3分類の問題点
- (2) 同文書の具体的問題点
- (3) 同文書の技術的問題点
- (4) 「世界の記憶」制度改善から「対話」勧告へ
- (5) 「国際倫理」「国際規範」の構築一「天地の公理」(横井小楠) …歴史的対立を打開する「交響的創造」
- (6) 「対話とは、思考のプロセスを再考し、確信されてきたものを再吟味し、新たなものを発見しつつ前進する手段であり、対話とは対決であり、試練であり、変容であり、通底する価値に身を投じるための手段である」=「和して同ぜず」の和の精神は「異なるものの調和を意味」し、「対話のための理想的な場としての『道』」の文化の意義が確認された(ユネスコ創立 60 周年記念国際シンポ「最終公式声明」2005)

「WGIPと『歴史戦』—日本人の道徳を取り戻す—」

麗澤大学特別教授

モラロジー道徳教育財団道徳科学研究所教授

高橋 史朗

私は30歳のときにアメリカに留学いたしまして、GHQ文書のCIEすなわち民間情報教育局という、教育改革に関する部局の文書を3年かかって調査いたしました。当時、年間100枚しかコピーができなかったために、私が筆写した資料は段ボール10箱分を超えております。さらに、その後、中西輝政先生、現在京都大学名誉教授とお会いする機会がありまして、「ルース・ベネディクトの資料を調べないと先生の研究はなかなか明確にならないのではないか」というアドバイスを頂きました。

そのときまで私はルース・ベネディクトの『菊と刀』は文化人類学の学問的な著作だと思っておりまして、心理戦略の政治論文だという認識は全くございませんでした。しかし、その中西先生のアドバイスを受けまして、平成25年にアメリカのニューヨーク州にあるヴァッサー大学、これは名門の女子大でございますが、ベネディクトが卒業した大学でございます。その大学にベネディクト文書の調査に参りました。そして、その調査の中で、実はこのルース・ベネディクトの『菊と刀』の土台となった理論があるということが分かりまして、それは後ほど詳しく申し上げますけれども、ジェフリー・ゴラーというイギリスの社会人類学者の資料が、イギリスのサセックス大学にあるということが分かりまして、すぐに今度はイギリスに飛びまして、サセックス大学でその資料を研究いたしました。そして、ベネディクトのベースになったゴラーの理論がどういう情報によって形成されたかということを実

証的に研究してきたわけですが、その後、それが単なる個人の見解ではなくて、太平洋問題調査会というニューヨークで開かれた国際会議でオーソライズされたものであるということが分かりまして、今度はコロンビア大学のこの太平洋問題調査会の文書が所蔵されてるバトラー図書館に調査に参りました。そして、この War Guilt Information Program の陣頭指揮をしたブラッドフォード・スミスという方の文書が UCLA、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の図書館に所蔵されているということが分かりまして、今度はロサンゼルスにも行って総合的に研究してきたわけであります。

実は私が 30 代の時期に GHQ 文書を研究して大変驚いたのは、敗戦直後の日本人には戦争についての罪の意識はないということが GHQ のマンスリーレポート、月報に書いてありました。敗戦直後には戦争についての罪悪感がなかった日本人が、なぜ今日は贖罪意識、戦争贖罪意識が非常に強くなったのか。例えば原爆碑には「二度と過ちは繰り返しません」と書いてありますが、それはアメリカが原爆を落とした過ちではなくて日本が侵略戦争をした過ちと、こういうふうになっている。そういう戦争贖罪意識というものは一体どのように形成されたのかという疑問を持つようになりました。敗戦直後に全くないと占領軍が認識していた戦争贖罪意識が戦後どのように形成されたのか。それを実証的に研究してきたわけですが。

さて、レジメの冒頭をご覧いただきたいんですが、戦後の日本人の精神的劣化について何人かの方がコメントをしております。まず最初は作家の三島由紀夫さんであります。三島さんは『文化防衛論』という本の中でこのように指摘しております。「豊かな音色が溢（あふ）れないのは、断弦の時があったから」だと。弦が断られたからだ。つまり断絶があったからだ。こういうふうになっているわけであります。

あるいは平成 28 年の 8 月 15 日付の産経新聞の「正論」欄に、作家の曾野綾子さんは、「日本人の美德の崩れが恐ろしい」というテーマで次のように指摘されました。「建築の強度偽装、自動車の燃費に関する虚偽の申告、歴史ある大手企業の粉飾決算など、日本人の誇りだった誠実と職人気質を失った

姿を見ると、私はわが国の将来に暗澹（あんたん）たるものを見る。彼らは仕事の発注者や株主や消費者を騙（だま）しただけではない。日本という国を詐欺の容疑で売った新しい『売国奴』に等しいのである」と、このように指摘されました。

あるいは、マレーシアの元上院議員のノンチックさんという方は、「日本人よ ありがとう」というタイトルでこのような詩を書いておられます。「かつて日本人は清らかで美しかった。かつて日本人は親切で心豊かだった。アジアの国の誰にでも自分のことのように一生懸命尽くしてくれた。何千万人も人の中には少しは変な人もいたし、怒りんぼやわがままな人もいた。自分の考えを押し付けて威張ってばかりいる人だっていなかったわけではない。でも、そのころの日本人はそんな少しの嫌なことや不愉快さを超えて、おおらかでまじめで希望に満ちて明るかった。戦後の日本人は、自分たち日本人のことを悪者だと思ひ込まされた。学校でもジャーナリズムもそうだとしか教えなかったから、まじめに自分たちの父祖や先輩は悪いことばかりした残酷無情なひどい人たちだったと思っているようだ。だからアジアの国に行ったらひたすらこべこべこ謝って、『私たちはそんなことは致しません』と言えよと思っている。そのくせ経済力がついてきて技術が向上してくると、自分の国や自分までが偉いと思うようになってきて、上辺や口先では『すまなかった』、『悪かった』と言いながら、独り善がりの自分本位の偉そうな態度をする。そんな今の日本人が心配だ。本当にどうなっちゃったんだろう。日本人はそんなはずじゃなかったのに。本当の日本人を知っている私たちは、今はいつも歯がゆくて悔しい思いがする。自分のことや自分の会社の利益ばかりを考えて、こせこせと身勝手な行動ばかりしているひよろひよろの日本人は、これが本当の日本人なのだろうか。自分たちだけで集まっては自分たちだけの楽しみや贅沢（ぜいたく）にふけりながら、自分がお世話になって住んでいる、自分の会社が仕事をしている、その国と国民のことをさげすんだ目で見たり、ばかにしたりする。こんな人たちと本当に仲良くしていけるだろうか。どうして、どうして日本人はこんなになってしまったんだ」と、

こういう詩を書いているわけであります。

私は、代々木オリンピックセンターで、アジアからの留学生を集めて何度も懇談会をやってきました。今年の8月には明治神宮で ASEAN の留学生に集まっていたいで、日本の中学生、高校生、大学生と交流をさせていただいて、その実行委員長をさせていただきました。アジアからの留学生が盛んに言うのは、「私たちは日本に学べということで日本にやってきたけれども、日本の大学生と話をしていると、なかなかその学ぶべき日本がはっきりしない」と。「質問しても返ってこない」と。交流会の後、例えばお酒を飲んで、今はコロナでカラオケもやりませんが、コロナの前は随分カラオケも盛んでした。ところが2次会に誘っても、ほとんどのアジアの留学生が断りました。なぜかと聞いたら、「ただ空騒ぎをしてどんちゃん騒ぎをするだけで、日本について知りたいのに、日本について日本の大学生は何も語ってくれない」と。「質問にもちゃんと答えてくれない」と。「だから、むなしただけだ」と、「時間の無駄だ」と、「お金の無駄だ」と。こういうわけで大変寂しい思いをしたことを覚えているわけでございます。

さて、なぜそういう日本になってしまったのか。戦後と戦前の大きな区切り、昭和天皇が敗戦時にお書きになった終戦の詔書がございますが、その中には「義命の存するところ」と、もともと「義命」という言葉を使っていました。内なる道義の至上命令という意味であります。内なる道義の至上命令、そういう義命の存するところ、耐え難きを耐え、忍び難きを忍んでというのが終戦の証書のご文章でございました。安岡正篤さんの最初の案には「義命」という言葉があったわけですが、これが最終的には言葉が難しいということで「時運の赴くところ」というふうに変更になりました。これはまさに道義国家日本というものが変質した象徴的な例と言えます。

さて、本論に入りたいと思います。私はまず、この『菊と刀』というルース・ベネディクトの論文がどのように書かれたかということをヴァッサー大学で徹底的に調べました。このルース・ベネディクトの『菊と刀』という作品は、実はアメリカ軍が対日心理戦略の論文としてまとめさせたものであります。

これは『日本人の行動パターン』という、これも日本語に訳されていますが、もともとその論文に加筆したものでありまして、この『菊と刀』の論文の本質を早くから見抜いていたのは、国際日本文化研究所の所長をされていた宗教学者の山折哲雄氏であります。山折哲雄さんは次のように解説をしています。「アメリカの戦時情報局のために行った政策研究」、これが『菊と刀』だと、それは「戦闘的な政治学の論文」だと。「重心を低くして、ひそかに獲物に狙いを定めていた」と。その獲物は何か。それは「武士道道徳と天皇信仰にびたりと照準を合わせていた」。「文化人類学的粉飾の背後に隠された本来の意図」を見抜く必要がある。「国民性の研究」、日本人の国民性を研究するというのは、「敵の精神に打撃を与える無形の武器」だと。

これ読むだけでは皆さん、ぴんとこないかもしれませんが、どこに狙いを定めれば日本人が日本人の自信を失うのか。それは武士道と天皇信仰だと。このようにベネディクトは照準を合わせていたと、こう言うわけであります。

後ほど申し上げますが、実は War Guilt Information Program の陣頭指揮をしたブラッドフォード・スミスは、「日本精神の核は3つだ」と言っています、ここに出てくる武士道、それからここでは天皇信仰と言っていますが、ブラッドフォード・スミスは「皇道」と言っています。

皇道というのは、天皇が仁徳をもって国を治める政道。歴代天皇が国を治めるにあたってどういうことを大事にされてきたかという、歴代天皇に共通している価値観、生き方、そういうことを皇道と言っているんですが、その皇道と神道と武士道、これが日本精神の核だと、こう言っているんです。

『菊と刀』、菊と刀をめであるという日本人の美しい感性。現在、私は毎日明治神宮に参拝しておりますが、ちょうど11月23日まで菊の展示会をやっております。素晴らしい菊がたくさん並んでいて、その菊の素晴らしさに心をときめかせる美しい日本人の感性、そういう美しい心を持った日本人が、一方、刀というのはここでは軍国主義のシンボル。「伝統的軍国主義」というキーワードが占領文書に出てまいります、日本人の国民性の中にはそういう菊をめである美しい感性と、それに矛盾するような軍国主義を賛美する、そうい

う二面性がある。これが日本人の日本精神の本質なんだと、こういう分析をしております。

さて、中身に入っていきます。『菊と刀』の第1章は、「研究課題・日本」というタイトルが付いております。ここで述べられていることの一番のポイントは次に引用しておりますけれども、このように書かれています。「日本軍と日本本土に向けたプロパガンダにおいて、私たちはどのようなことを言えば、アメリカ人の生命を救い、最後の一人まで徹底抗戦するという日本人の決意をくじくことができるだろうか」と。

先ほど『菊と刀』はアメリカ軍の心理戦略の政治論文だと言いましたけれども、どういうメッセージを発すれば、どういうプロパガンダをすれば日本人が自信を失い日本兵が意欲を失うかと、そういうことを研究したのがこの第1章、研究課題であります。

そして次に注目すべきは第3章ですけれども、ここではこう述べております。まさに精神的な武装解除の狙いの核心が、日本人の倫理体系の根底にある階層制度、カースト制度の解体だと。つまりそれは、国家で言えば天皇を中心とした階層制度。家で言えばそれは家長、父親を中心とした階層制度。男性が優位で女性とその下に置かれていると。こういう階層制度が「有史時代を一貫する生活原理」になっていると。こう言うわけです。

具体的にはさらにこう書いてあります。「秩序と階層制度に対する彼らの信頼と、自由と平等に対する我々の信仰とは、まったく対極にある」と。「正しい憤りをもって『階層制度』と戦う」と書かれています。つまり、自由と平等というものを大事にするアメリカ人の価値観に対して、日本は秩序と階層制度というものがその価値観の核にあるものだと、こう捉えたわけでありませう。

そして次に「罪の文化」と「恥の文化」というものを単純な二分法で分けています。どこが違うかといえば、「罪の文化」というのは内なる基準に基づいている。これが「罪の文化」。先ほど「義命」というのは内なる道義の至上命令と言いましたが、日本人は内なる道義の至上命令を大事にしてるんですか

ら、それは内なる基準に基づいてるんであって、日本人の文化には「罪の文化」がないってというのは甚だしい誤解であります。しかし残念ながら欧米は「罪の文化」、日本は「恥の文化」と、こう二分法で分けました。「恥の文化」は「罪の文化」とどこが違うかといえば、基準が他者の目にある。外なる基準で自分を見ていると。恥ずかしいという、それは他者の目から見て自分の行動が恥ずかしいと、こういうのが「日本人の国民性」だと。

こういうふうに「罪の文化」と「恥の文化」というふうに二分法で分けたわけです。しかし先ほど申し上げたように、日本人も「義命」という言葉がよく表してるように、内なる道義の至上命令ということは自らの内なる道義によって自らの行動を律するという、まさに武士道の中にはそういう「義」というものが根付いていたわけであります。

さて、最終章は「対日占領の意義」というテーマで書かれております。この中にはこのように書いてあります。キーワードが幾つかあるんですが、「日本人の古くて危険な侵略的（攻撃的）性質の型」というキーワードであります。これが日本人の性格構造の中核だと言うんです。「古くて危険な侵略的（攻撃的）性質の型を打破し、新しい目標に向かわせること」、これが対日占領の意義だと。

そこで、この侵略的（攻撃的）性質の型というものをどう捉えたかということが大事なポイントになるんですけども、もう一つのキーワードが「病的特性」という言葉です。日本人の国民性というものは、病的特性があると。そしてそれは何によって形成されたかという、用便の厳しいしつけ、彼らは「トイレット・トレーニング」という言葉を使っています。何度も何度もこの言葉が文書に出てくるんですが、トイレット・トレーニングによって厳しく用便のしつけをされて、布団の上でうんこをしてしまうと厳しいしつけを受けたと。こういうことを強調しているんです。その後、神聖な布団で、布団を便で汚すことは最大の罪だと見なされた。そこで厳罰が与えられ、厳しいしつけをされて、それが原因で集団的な強迫神経症となったと言うんです。

皆さん、どう思いますか。厳罰と厳しいしつけが日本人の国民性の形成要因となったと。不安感や恐怖感が精神的トラウマとなって集団的な強迫神経症となったと。一個人ではなくて、日本人の国民性がそういう集団的な強迫神経症になったというわけであります。

確かに厳しいしつけがあったことは事実です。そして便で布団を汚したら厳しく叱られたということもございました。しかし、それが国民性を形成するほどの要因であったかという点、それはあまりにも極端な、私はトンデモ学説だと言っておりますが、そういうことを唱える学者がいても、それは学問の自由、思想の自由でいいんですけども、それが後に述べる多くの専門の学者が集まって集団で議論をした太平洋問題調査会の会議の結論となって、占領政策のベースとなったということが大問題であります。侵略的・攻撃的な性質の型、これが厳しいトイレット・トレーニングによって形成されたと。これがジェフリー・ゴラーのトンデモ学説なんです、これが対日心理政策の土台になった。War Guilt Information Program の土台になったということが問題だと私は捉えております。

どこが的外れかと言いますと、ぜひ皆さんに読んでいただきたい本に、渡辺京二という方が書いた『逝きし世の面影』(平凡社)という本があります。『逝きし世の面影』という本を読みますと、江戸末期にやってきた外国人が日本の幼児を見て、世界一幸せだと。この本の第10章は「子どもの楽園」というタイトルになっています。

この時代は幸福度調査というのはなかったと思いますけれども、最近ユニセフが精神的幸福度の調査をすると、日本はビリから2番目というのが大きな問題になっています。あるいはPISAの調査で、高校生調査でも、日本の高校生は世界のどの国よりも一生懸命学校で勉強してるんですけども、「人生の目的や意義が実感できない」が最も多いと、こういうことが明らかになっている。あるいはユニセフの15歳の孤独度調査でもダントツは日本の15歳でありまして、世界で最も孤独です。世界で最も幸せで笑顔があふれていた日本の子どもたちが、なぜ世界で最も孤独になってしまったのか。これは改

めて別に考えなければならぬテーマですが、ここで私が申し上げてるのは、日本の子どもたちが外国の人たちにはいかにも笑顔があふれていて幸せな表情に映ったわけであって、もし仮にこのトイレット・トレーニングというもので集団的な強迫神経症となっていたとすれば、そんな幸せな笑顔をしているはずがないのであります。多くの外国人が共通して見た日本の子どもたちの笑顔というものは、いかにトイレット・トレーニングというものが日本の伝統的な子育てではなかったかということ逆を証明しているのではないかと思うわけでございます。

さて、私は War Guilt Information Program については、先ほど学長がご紹介いただいたこの本と共に、これは私が現在勤めているモラロジー道徳教育財団と言います。かつてはモラロジー研究所と言いましたが、ここから出した『WGIP (ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム) と『歴史戦』』という本、これが一番新しい本でございます。その前にこの War Guilt を扱った本は5冊ぐらいありまして、この前に書いたのはこの本なんです。『日本を解体する』戦争プロパガンダの現在 WGIP (ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム) の源流を探る』(宝島社)ということで、今日、そのエッセンスはお話ししますが、War Guilt Information Program の出発点は何か。源流はどこにあるのかということを実証的に研究しました。

その前に書いた本は、致知出版というところから出した、『日本が二度と立ち上がれないようにアメリカが占領期に行ったこと』という、とても長いタイトルでございますが、部数的にはこれが一番読まれてるのでしょうか。今、何刷りまで行ってますかね。今も出てますから、これが最も読まれている本でございます。

さて、ゴラーという人は先ほど申し上げたようにイギリスの社会人類学者なんですけども、彼が書いた本が『日本人の性格構造とプロパガンダ』という本です。これは今、日本で出版されてますから、皆さん、ぜひ読んでみてください。この War Guilt Information Program の土台となった論文です。このゴラーの論文がどういう背景でつくられたかということ、私は彼の

文書が所蔵されているイギリスのサセックス大学で徹底的に調べました。

そしてもう一つは太平洋問題調査会という、これは後で申し上げますけれども、1944年の12月16日～17日に開催された「日本人の性格構造分析会議」という、これが1泊2日で行われているんです。この中でどのような結論が出たかということに注目したんです。

ヴァッサー大学というベネディクトが卒業した大学にはベネディクト文書が膨大な量で存在しておりまして、その中で注目されるのは第3章、「プロパガンダと日本人」という章が墨塗りされて削除されています。それは「プロパガンダと日本人」という章がいかに重要かということを物語っているんですけども、ラインバーガーという人が1948年に『心理戦争』という本を出版しております。これはあまり知られてないので、少しここで紹介しておきたいんですが、『心理戦争』、『Psychological Warfare』というのが原文でございますが、その中で大変注目されることが書いてございます。ラインバーガーがこういうことを言っているんです。日本の幼児は場所柄をわきまえず、粗相をすると途中で止められるか、ひどく叱られるという事実が心理作戦を立てる上で重要であることが発見された。心理作戦の企画上、重要な発見とラインバーガーが指摘したのが、このトイレット・トレーニング。彼は、こう書いてます。間違いじみて勇敢で、外国人にはあからさまに残酷な日本人の二面性の性格構造は、このトイレット・トレーニングによって形成されたんだと。

ゴラーは、まず日本の嬰兒（えいじ）、赤ん坊の、生後40カ月あまりの経験を研究しました。いかにして赤ん坊が用便の訓練、トイレット・トレーニングを受けたか。いかにして乳離れをさせられたか。いかにして家庭のしつけに合うように訓練されたかということの研究しまして、彼の結論は、日本の家庭生活は子どもを動揺と侮辱の交じった気持ちで世に出すことだと。つまり、厳しいしつけをしてストレスがたまった、そのストレスが集団的な強迫神経症となって、やがて南京虐殺やさまざまな侵略戦争に発展したという、その心理的なストレスが戦争にまで一気に飛躍するという、ここに無理

があるんですけども、このことについて異論を唱えた文化人類学者はたった1人しかいなかったんです。私はそのことが大変不思議で仕方がないんですが、このことは後で指摘します。

このゴーラーという人は、戦時情報局の外国人戦意分析課の日本班の主任をしていました。つまり日本人の兵隊に対する心理作戦をする責任者。その心理作戦の主任をしていた。後にこのゴーラーが後任に選んだのがベネディクトであります。つまり、対日心理作戦の要になったのがこのゴーラーであり、次にそれを継承したのがベネディクトでありました。

そしてこのラインバーガーという人は、対日心理戦争計画である「日本計画」の基本文献としてこのゴーラーの論文を用いています。この「日本計画」というのが非常に重要な文献なんです。対日心理戦争の計画としては、その核になったのは、このゴーラー論文であるということが明らかになっています。

ジョン・ダワーという有名なアメリカの学者がいますが、彼はこう言っています。ゴーラー論文は「戦時米国における日本人論の唯一最大の影響力のある学問的分析で、戦時情報局の対日ホワイト・プロパガンダのバイブル」、こう言っております。

次に日本人の性格構造分析会議がどのように行われたかに移りたいと思います。これはコロンビア大学のバトラー図書館に保存されております、この記録によれば、まず日本兵の日記を回覧しながら、『チョコレートと兵隊』という1938年に上映された映画を会議の参加者が全員で見ました。そして、日本人の病的な特性とか伝統的な攻撃性の根本原因はトイレット・トレーニングにあるという結論になっているんです。

このトイレット・トレーニングが原因だという情報は誰からゴーラーにもたらされたかということ、私はサセックス大学で調べました。情報源は2人あります。これは資料には書いてないんですけども、この情報をゴーラーに与えたのは、1人は日本では有名な神格化された政治学者と言ってもいいハロルド・ラスウェルという、丸山眞男さんに影響を与えた非常に有名な学

者であります。彼が「日本人の子どものしつけに関する件」という報告書を作成しています。これがイギリスのサセックス大学に保存されていて、ゴラーはこれを参考にしたことが分かっています。

もう一つは、横浜にあります共立学園のルーミス校長からの聞き取り調査。この中にこういうことが書いてあります。「子どもが犯す最も深刻な罪は、神聖なものとされている布団を汚すことであり、トイレット・トレーニングが厳格に行われた」と。これがルーミス校長からの聞き取り調査の中に書かれています。つまり、こうした日本人の二面性の原因がトイレット・トレーニングにあるという情報は、今申し上げたアメリカの有名な政治学者、ハロルド・ラスウェルと、横浜共立学園のルーミス校長からの情報であるということがサセックス大学の資料によって明らかになったわけであります。

もう一つ、3番目でございますが、「危険な侵略的（攻撃的）性質の型」というのが『菊と刀』に書いてあります。これが南京虐殺や侵略戦争につながったという認識をしているわけであります。私が最も驚いたのは、日本人とアメリカの不良少年には性格構造で28項目の類似点があると結論付けていることであります。この28項目を紹介するのもいかがかと思いますが、資料にはないので一応読み上げましょうか。アメリカの不良少年と日本人の国民性の共通点という表がありまして、こういうことがこの専門家会議で確認されている。私たちから見ればいかにも不適切でございますが、こういう指摘があるということをご報告だけします。

まず共通点の第1、徹底した個人の不安定感。2、グループへの完全な服従とグループによる支配。3、失策に対する断固とした規律と罰則。4、全世界と交戦状態にあるという感覚を“常に”持つ。5、敵は、一般的な言葉による以外、正体は特定できない。誰もが潜在的な敵、あるいは活動中の敵か、または嫌なやつになりそうなものだ。6、よそ者は、みな軽蔑の対象である。7、他の不良少年よりも優れている。8、敵対者、反対者は全て臆病か卑劣のどちらかだ。9、非情である。情がないということです。それは、みなが何らかの抗争になる危険を抱えるか、敵がばかなやつだからである。10、不

良少年がうまくいっている限りは、自己犠牲の意志を持っている。11、リーダーと完全に一体感を持っている。12、シンボルや名前などの同一化に重要な意義がある。13、不良少年は無敵であるという未熟な感覚がある。14、内面的な志気と、外界とは無関係な風習・規範がある。15、不成功で瓦解（が）かいたときは自動的に相手を受け入れ、相手の規範を受け入れることが可能になる。16、不良少年の一因は、母性を求めて全面的に感傷的になる。おそらく愛されていないと感じることから逃避しようとするのだろう。17、外界の善意に不信になる。18、善意、厚遇、お辞儀などに驚き、素直に従う。19、個人の勇氣、名声、成功に大きなプライドがある。20、常に大きな勝負、大きなことをする。つまり、つまらない悪を探し求める。21、身体的剛勇さを高く評価する。つまり臆病なのだ。22、他人の、あるいは自分自身の命を極端に粗末にする。これは切腹をするとか、そういうことにつながっていると、言いたいんでしょう。23、道徳観という意味で、名誉、面目を大いに美化する。この場合、不良少年を見捨てないということでも面目が達成される。不良少年を見捨てることに対する罰は、死か、永遠の恥辱である。24、面目を失くしたものは二度と古巣に帰れない。なぜなら、その不良少年の外部の犯罪者でさえ、後に後ろ盾を指すからである。幻想と現実がしばしば同一化する。26、一か八かの態度は、失敗に結び付けられるとは限らない。27、物事がうまくいかないと、楽観主義と疑惑の間で揺れる。28、外部の世界は悪であると。これは、この本に詳しく書いてありますので、『日本が二度と立ち上がれないようにアメリカが占領期に行ったこと』という致知出版から出ている本に書いてありますから、もしもう少し知りたいということであればこれをお読みいただければと思います。

さて、資料に戻らせていただきます。私たちから見ればいかにも日本人の性格構造の本質を誤解している、こういう認識が共有されたことは大変心外であります。ところが、ジョン・エンブリーという、この人はアメリカの文化人類学者ですが、この人が唯一、この論に異論を唱えた学者であります。彼はこう言っています。「トイレット・トレーニングへ飛躍したり、国際関

系の現象へと飛躍するのは方法論的に無理があると考える者はわずかしかない」と。つまり、トイレット・トレーニングが原因で集団神経症になって、これが侵略戦争や南京虐殺の原因だというのは話が飛躍し過ぎてるじゃないかということを彼は指摘してるんですが、そういうふうを考える者はわずかしかないと言っています。つまり専門の学者はみんなこのトンデモ説に賛成したということが、私たちには大変驚きであります。

さらに、デイビット・プライスがデューク大学出版から出した『人類学的知性』という本を読んでおりましたら、こう書いてありました。先ほど申し上げた唯一これは間違っていると異論を唱えたエンブリーは、日本の軍国主義のルーツは関税規制と島国環境による天然資源不足にあるのであって、ゴラーが言っているような仮説とされるような内面的心理的欠陥によるものではないと考えたが、1950年、FBIによって不慮の事故を装って暗殺されたと、こう書いてあります。

さて、私は War Guilt Information Program の出発点は、クルト・レヴィンを中心としたタヴィストック研究所の研究会であったと捉えています。タヴィストック研究所っていうのは、あまり多くの方は知らないんですけども、なぜ私がここに注目したかといいますと、ゴラーという人がルース・ベネディクトとどこでつながったのかということがまず謎でした。そして、ラッセルという人とどうつながったのか。そしてマーガレット・ミードという、私は4期8年、政府の男女共同参画会議の有識者議員をしてきましたけれども、今、男女共同参画会議の多くの識者たちは、このマーガレット・ミードのジェンダー論に立脚してる方もたくさんいらっしゃるわけですが、今日でも大きな影響を与えているこのマーガレット・ミードとベネディクト、ゴラー、ラッセル、彼らは実はこのクルト・レヴィンを中心としたタヴィストック研究所の研究会で知り合っているのです。そしてその研究会では何が議論されたかといいますと、どういう心理戦争の方法を用いたらもっと効果的に敵の抵抗精神を弱めることができるかという問題について議論を重ねてきたわけであります。

さて、その対日心理作戦というものがどのように War Guilt Information Program に継承されてきたかという歴史的な経緯についてご説明したいと思います。まず、アメリカの戦時情報局の対日心理戦略、対日心理作戦のハンドブックの冒頭にはこのように書かれております。「プロパガンダとは、相手の考えや行動を支配するための手段であり、相手の思考過程に影響を与えるのみでなく、アイデアをその思考の中に微妙に巻き込んでしまう無形の戦略である」と書いてあります。

War Guilt Information Program の思想的な源流は、先ほど申し上げたようにタヴィストック研究所というところにあったと私は捉えています。そして実践的な源流は、中国の延安の日本捕虜洗脳計画、日本兵の捕虜洗脳教育と関係があると考えています。このことについてはさまざまこれまでの研究で私は明らかにしてまいりましたが、例えばジョン・エマーソンという人が、この人は私が2年間留学していたスタンフォード大学のフーヴァー研究所の同じ研究員でしたので、2年間、よくお話をする機会がありました。彼が1957年の3月12日にアメリカの上院の国内治安委員会。国立公文書館、イギリスの国立公文書館の文書でこれが発見されたんですけども、この中で証言してるのがこのことに関連をしております。

それはどういうものかといいますと、エマーソンは『嵐のなかの外交官：ジョン・エマーソン回想録』（朝日新聞社）という本も書いておまして、彼は野坂参三とそのグループの成功は次のような結論をさらに強めたと言っています。「ひとたび日本国民が敗戦意識を抱くようになれば、日本兵捕虜が経験したと同じような心理的变化がそこに生ずるだろう」と述べております。そして、アメリカの対日心理作戦の洗脳のアイディアというものの手法を延安で徹底的に調査したと。コミンテルンの代表であった野坂が、日本共産党の後押しでアップル・プロジェクトという対日工作員を送り込む計画をアメリカの戦略諜報局に提案して、そして諜報局から多くの日系人が野坂の下に送り込まれたという事実がございます。イギリスの国立公文書館の先ほど申し上げたエマーソン証言によって、War Guilt Information Program の実践

的な原型というものは、軍国主義者と国民という架空の対立を導入して、軍国主義者という共通の敵の打倒を目指すという延安での日本兵捕虜洗脳教育にあったということが明らかになりました。

これは江藤淳さんも指摘されていますが、軍国主義者と国民という対立はもともと存在しませんでした。それを、その架空の対立を導入して、共通の敵は軍国主義者だと。つまり軍人たちが共通の敵なんだと。日本兵は中国の捕虜になったときに大変厳しい仕打ちを受けるだろうと恐れておりました。ところが中国の取った作戦は今で言えば“友達作戦”であって、あなたたちと私たちは友達だと。共通の敵は日本の軍国主義、軍人たちだと。その国民に反する一部の軍人たち、軍国主義者が侵略戦争をやったんだと、こういうふうに洗脳したわけでありました。軍国主義者と国民という対立図式を持ち込んだと。これは延安の日本捕虜洗脳教育と関係があるというわけでありました。

ブラッドフォード・スミスという War Guilt Information Program の陣頭指揮を日本で執った方がいます。戦後の歴史教育の土台となった『太平洋戦争史』を書いているのは、ブラッドフォード・スミスであります。これが元の原文の英文原稿であります。私たち戦後世代はその『太平洋戦争史』を学びました。大東亜戦争を戦ったのが日本人でございましたが、大東亜戦争という言葉は占領軍によって決して使ってはならないと禁止され、それに代わって『太平洋戦争史』が私たちの戦後の歴史教育の土台になりました。しかし、悲しいかな、この戦後世代が学んだ『太平洋戦争史』は英語で書かれています。書いたのはブラッドフォード・スミスであります。私はこの『太平洋戦争史』の原文を英語で読みましたけれども、その多くがどこから引用されてるかという、これも翻訳がされていますが『平和と戦争』という、今は古本屋でも多分ないと思います。これはアメリカの国務省がまとめた米国史観、アメリカの公的な歴史観が書かれたのが『平和と戦争』です。この『平和と戦争』を大幅に引用しているのがこの『太平洋戦争史』であります。つまり、勝った国が負けた国を裁いた善玉悪玉史観、これをベースにして実は『太平洋戦争史』が書かれている。したがって、この『太平洋戦争史』を学んだ日

本の戦後世代が自虐史観になるのは当然であります。勝った国が負けた国を裁いた善玉悪玉史観が『太平洋戦争史』の土台になってるんですから、敵国が日本を裁いた戦争の善玉悪玉史観で私たちの戦後の歴史教育が行われてきたわけです。今日の自虐史観といわれる現実が起きてるのは、そういう背景があるからであります。

さて、その『太平洋戦争史』を書いたブラッドフォード・スミスは、何と1942年に注目すべき2つの論文を書いているのであります。注目すべきなのは1942年に書かれているということです。日本が戦争に負けた3年前に、既にコミンテルンの外郭団体であるアメリカのシナ人友の会の機関誌、『アメラジア』という機関誌に2つの論文が載っています。そして日本精神というのは、今日、最初に申し上げたように、3つの柱があるということです。日本精神の柱は神道と皇道と武士道だと。この3つが伝統的な軍国主義を形成している。

伝統的軍国主義がなぜキーワードかということ、ドイツに対する占領政策と日本に対する占領政策の違いがここに顕著に表れているんです。アメリカはドイツに対しては、ナチズムは一時的に台頭したものだとして、そのナチズムを排除すれば健全なナショナリズムになると考えました。日本は違うと。日本は、日本の伝統精神が軍国主義なんだと。それは神道や皇道や武士道という、その伝統精神が軍国主義だという、こういうレッテル貼りをした。これが最も日本人の自信を失わせる、戦前、道義というものが大事にされたわけですが、道義というものの根幹を揺るがすプロバガンダになったわけであります。

「日本—美と獣」という論文にも、『菊と刀』と共通する認識があります。つまり日本人の国民性には二面性があるんだと、矛盾してる面があるんだと。美しい菊をめぐる美という感性をもつ反面、南京虐殺をして獣と化すという、この二面性。これが日本人の本質であって、それは先ほどから申し上げているトイレット・トレーニングによってもたらされたゆがみだと、こういう認識に立っているわけであります。

さて、もう一つ注目すべきなのは、ボナー・フェラーズという人が招集したマニラの対日心理作戦会議というのがあるということです。これは1945年の5月7日～8日にかけて行われています。これは私が前に2冊の本を書いたときにはまだ十分に熟読していなかったもので、この最新の拙著『WGIPと「歴史戦」』（モラロジー研究所）で取り上げたものでございますが、ボナー・フェラーズという方は1942年の7月に戦略諜報局というところに配属されまして、1943年に南西太平洋地域総司令部参謀第五部長になりまして、1944年から新設された心理作戦部の部長として対日心理作戦を主導しました。ですから、このブラッドフォード・スミスと同じようにボナー・フェラーズという人も対日心理作戦を主導したリーダーの1人であります。

彼は先ほど申し上げた1945年の5月7日～8日にかけてマニラで対日心理作戦会議を開催したんです。ここにGHQの戦後の教育改革を担当した民間情報教育局の局長、ダイクなども参加しています。このCIE、民間情報教育局の文書が240万ページあるんですけども、これを30代の時期に斜め読みで徹底的に調査したわけですが、そのCIEの責任者がダイク局長。この方がこの作戦会議に参加していたのであります。

そして、どういうふうにもこの民間情報教育局にWar Guilt Information Programが継承されたかという経緯を整理します。アメリカの情報調査局というのがありまして、これが戦時情報局、OWIといいます。こちらはホワイト・プロパガンダと言いまして、情報源が明らかな広報宣伝をするところ。これがOWI、戦時情報局。

もう一つ、OSSという、こちらは戦略諜報局という名前で、ブラック・プロパガンダ。ブラック・プロパガンダというのは、情報源が公でない、非公開、非公然で、偽りのメッセージを発する。これが諜報局であります。

この2つに受け継がれた対日心理戦略が、国務省の戦後計画委員会という部署と国務・陸軍・海軍三省調整委員会、これはSWNCCと英語では言いますが、これは対日占領政策の最高決定機関なんですけども、そこを経て、GHQのCIEにWar Guilt Information Programとして継承された。これが経

緯でございます。その経緯は私の本の中に詳しく書いてありますから、詳しくは本をお読みいただきたいと思います。

さて、ハル國務長官はこう言っております。「日本の軍国主義は国民の伝統に基づいているという点において、ドイツやイタリアとは異なる」と。これが先ほどから申し上げている日本の「伝統的軍国主義」という誤解。この基には実はホルトムという人、それから今日申し上げたゴラーやベネディクトの影響があるんですが、ホルトムという人は神道指令に影響を与えたんです。

私は神道指令の草案をアメリカで発見しました。2年半かかりましたけれども。バンスという宗教課長がバージニア州に住んでおられたので、彼の自宅を訪ねてインタビューをしました。まず冒頭に申し上げたのは、「神道指令をつくったバンスさんは神道と軍国主義を混同しましたね」と。まず私はそのことを開口一番申し上げました。そして、アメリカの國務省の神道に関する分析文書を提示しました。

アメリカの國務省は神道や神社というものを3つに分類しておりました。まず本来の神社はピュアなものであって軍国主義とは無縁のものであると、こう分析しております。

2番目の分類は、この本来の純粋なピュアな神社に軍国主義が「異質な接ぎ木」をされたと書いてあります。「異質な接ぎ木」をされた軍国主義が交じっている神社があると。これが彼らの分析では伊勢神宮とか靖国神社だと言っている。これは間違っています。この考えは私は間違っていると思いますが、彼らは「異質な接ぎ木」という言葉を使ってるのは、軍国主義は異質ですよ。つまり伝統的な神社とは異質なんですよということを区別してるわけです。ですから少なくとも國務省のレベルでは、本来の神社と軍国主義的なものが接ぎ木されてるものと区別していたということが分かります。

それから彼らが3つ目に分類してる神社は軍国主義一辺倒の神社だということです。これは国家的英雄を祭っている、今で言えば東郷神社、あるいは乃木神社。こういう軍神を祭っている神社は、これは軍国主義の神社だと。

そこでアメリカ国務省はどう考えたかという、軍国主義一辺倒の神社は廃止しろと。本来のピュアな占領政策に無害な神社と異質な接ぎ木されてるところは、異質な軍国主義を排除すれば、残してもいい。本来の占領政策に無害なピュアな神社は別に何の問題もないと。こういうふうには々々分けていたんです。

私はこの国務省文書をバンスさんにお見せして、「あなたはこの文書を読みましたか」とまず尋ねました。そうしたら驚くべきことに、彼は「初めて見た」と言いました。自分は大学改革を担当する予定で日本に派遣されたと。ところが神道の専門家がいなくて、神道指令を担当する専門家がいなかったので、急きょ、自分はその担当になったと。そこでホルトムというアメリカの神道学者の本を読んだと言うんです。

このホルトムは、日本の加藤玄智という学者の影響を受けたということが分かっています。これは國學院大學にホルトム文庫というのがありまして、そのホルトム文庫を調べたら、加藤玄智の本の中にホルトムの影響がはっきり分かる、ホルトムと加藤玄智の影響関係というものがメモ書きによって分かるということが判明しました。つまり、ホルトムが学んだ加藤玄智は、軍国主義と神道を混同してた面がありました。ホルトムは、その影響を受けて誤解をして軍国主義と神道を混同した、そういう本を書いています。それをバンスは一生懸命読んで、その彼の学説に基づいて神道指令をつくったということが彼のインタビューで分かったわけであります。

そういうインタビューに基づいて私は神道指令の成立過程という発表を神道宗教学会でいたしました。論文も書かせていただきました。軍国主義と神道と混同してしまったということは、ホルトムの影響が大きいと思われます。ですから「伝統的軍国主義」という考え方はこのホルトムの影響を抜きには考えられないと考えています。

そして、さらにこういう文書がありました。「イタリア、ドイツでの失敗の分析」という報告書がありまして、この中でこう書いてありました。「積極的で統合されたプログラムの事前の準備の欠如」の教訓から「再教育・再方

向付け」の積極的で統合されたプログラムの必要性があると。つまり、ドイツやイタリアの占領統治が失敗した原因が分析されてるんですが、ドイツ国民をどういうふうに再教育、再方向付けていくかという統合された積極的なプログラムがなかった。そこで日本にはそういうものを準備する必要があるんだと。こういうことが書かれておりました。

そして、これがSWNCCの「初期の対日方針」に受け継がれて、「再教育、再方向付け」というものを狙う「精神的武装解除」構想というものがつくられた。「精神的武装解除」。つまり、通常の占領政策というものは武装解除を目的とするのはどこの国も一緒であります。二度と軍事的な脅威にならないということは占領政策の柱であります。ところが日本に対しては、一時的に軍備を撤廃しても、日本の伝統精神が生きている限り再び軍国主義が復活する。そこで精神的な武装解除が必要だと。アメリカの國務長官が明確に「精神的武装解除」ということを明言しておりまして、日本の哲学、精神の武装解除が必要だということが政策として明確に採用されたのです。

さて、フェラーズの対日基本心理作戦の計画書。これは1945年の4月12日に書かれておりますが、ここでは3つの結論が上がっています。3つの結論は、士気をまず弱体化させる。軍部に戦争責任を負わせる。国民を啓発すると。そのためには心理作戦が必要であって、日本人の行動パターンとか天皇崇拜とか武士道についての記述がございます。

例えば日本人の行動パターンの分析ではこういうことが書いてあります。国家と家族に対する執着、日本人ほど家族の絆が強い民族はいないと。彼らの信仰の根源は親孝行であると。そこで、兵士が家族が抱え込んでいる貧困や苦難を知ることが士気を混乱させると、こう述べている。

あるいは天皇崇拜。これも大事なポイントだと言ってるんですが、なぜ天皇が最高の崇敬を受けているのか。なぜ天皇の宗教的尊厳が侵されることがないのか。なぜ天皇の存在が精神的に不可欠であることが衰退しないのかを理解する必要があると分析しています。

武士道については大変興味深いことが書いてあるんですが、日本人は武士

道、大和魂によってしつけられている。牛若丸と弁慶の話が引用されていて、両者は敵同士であったが、弁慶が負けると、彼は牛若丸の忠実な家来になる。このように敵対者の家来になるというのが日本の武士道であると。かくしてわれわれの捕虜は弁慶のように生まれ変わると。日本は今まで敵であったが、一気に捕虜になると、家来になると。こういうふうに一気に変わるんだと。

そこで、天皇をどうするかということがアメリカの占領政策の最大のテーマでございました。天皇処理政策という、まず天皇個人をどうするかということが大きく議論されておりまして、アメリカの上院では天皇を裁判にかけるということを全会一致で決議しておりました。当時の世論調査でも3分の1は天皇を処刑にすべきだと、こういう強い意見でございました。そこでアメリカ政府は、マッカーサーに天皇の戦争責任の資料を集めさせて、その証拠をワシントンに送らせるように指示をしました。マッカーサーはその命令を受けて、天皇の戦争責任の証拠を集めて、昭和21年1月25日に電報をワシントンに送ったんです。この電報によって天皇を処刑にしない、天皇を裁判にかけないということが決まりました。

この昭和21年1月25日のマッカーサーがワシントンに送った電報はこのようなものであります。「指令を受けて以来、天皇の犯罪行為について秘密裏に可能なあらゆる調査をした。過去10年間、日本の政治決定に天皇が参加したという特別かつ明白な証拠は発見されなかった」と。つまり天皇に戦争責任はないというのが結論だというわけです。ちょっと途中端折りますけれども、「天皇告発は日本人に大きな衝撃を与え、その効果は計り知れないものがある。天皇は日本国民統合の象徴であり、彼を破壊すれば日本国は瓦解するであろう。もし連合国が天皇を裁けば、日本人はこの行為を史上最大の裏切りと受け取り、長期間連合国に対して怒りと憎悪を抱き続けるだろう。その結果、数世紀にわたる相互復讐（ふくしゅう）の連鎖反応が起こるであろう。」数世紀と書いてあります。ベトナム戦争の比ではない。何百年にわたって復讐戦が起きると。さらに、「全ての日本人が抵抗し、行政活動のストップ、

地下活動やゲリラ戦による混乱が引き起こされるであろう。近代的、民主的方法の導入は消滅し、軍事コントロールが最終的に停止されたとき、共産主義的組織活動が分断された民衆の間から発生するだろう。このような状態に対処する占領問題は今までのそれとは全く異なるものである。これには少なくとも100万人の軍隊と数十万人の行政官と、戦時補給体制の確立を必要とするであろう。もし天皇を戦争裁判にかけるとすれば、前記のような準備が不可欠であることを勧告する」と。

100万の軍隊を送らないと駄目だと。数十万の行政官を日本に送らないと占領統治ができないと。それほど危機感を持ったのは、これは何が要因になったということは、これもだんだん分かってきておりますが、1つは昭和天皇とマッカーサーの会見にあったということはもう既にほぼ定説になっております。

私はアメリカに留学していた3年間、ノーホークのマッカーサー記念館で3回、日本占領のシンポジウムに参加しました。当時はまだマッカーサー夫人も参加されたし、上皇陛下に英語を教えたバイニング夫人も参加されました。あるいは憲法を制定した民政局次長のケーディスはじめ、幹部たちもそろって参加しました。シンポジウム後のパーティーなんかはまさに占領の懐かしい思い出話に花が咲くという、そういう会でございましたが、そのときバイニング夫人が私に話をされたことの中にこういうことがありました。これは上皇陛下、現在の天皇陛下にも、私、直接お話をさせていただきましたけれども、バイニング夫人は自分の友人に昭和天皇とマッカーサーの通訳をした人がいると。彼によれば、昭和天皇はマッカーサーに「You may hang me.」とおっしゃったと。hangは絞首刑にするという意味であります。「あなたは私を絞首刑にしてもいいから、日本国民を救ってほしい」とおっしゃった。その「You may hang me.」という言葉にマッカーサーは大変感銘を深くして、大きな影響を受けたと。

もう一つ私が注目したのは、実は名もない日本国民がたくさんマッカーサーの下に天皇の助命嘆願の直訴状を書いているということでもあります。私

が見た段ボール箱は8箱ぐらいでございますが、その中でも非常に目立ったのは、東京都の杉並区西荻窪に住んでおられた伊藤たかというご婦人が毎日血書を書いておられました。はがきで、「天皇に戦争責任はございません。天皇の代わりに私の命を喜んで差し上げます」と、こういう文章が毎日血書で書かれていて、血判が最後に押されていました。その膨大なはがきの中に1通だけ封書がありまして、その中に、これも血書で書かれていました。マッカーサー宛ての大変丁寧な天皇の助命を願う切々たる直訴状が入ってありました。

今日、時間の関係で読み上げませんが、実はこのことを PHP から出した拙著『総点検 戦後教育の実像』に書きましたら、これはぜひ天皇陛下に見ていただきたいということで、昭和60年の御在位60年のお祝いの日、時の文部科学大臣、田中龍夫氏が宮中に参内されまして、昭和天皇と式部官長と侍従長に私の本を寄贈されたということを経文の毛筆のお手紙で後知りました。いかに多くの国民が天皇の助命を嘆願する直訴状をマッカーサーに出したかということを知っていただきたいということでお渡しをされたことに私も大変感動いたしました。マッカーサーは天皇に関する国民の直訴状だけは英訳をして必ず見せろという指示をしています。

当時は教職追放に関する直訴状もたくさんあります。大学でいまだにこういう軍国主義の教育をやっていると言って多くの学生が先生を告発するような直訴状も殺到してございまして、そういう直訴状の多くの束の中で、天皇に関する直訴状だけは自分に見せろということを経文があえて指示をして、マッカーサーが。いかに戦後の日本の国民の中で天皇というものがどう存在したかに彼が注意を払っていたかということがよく分かるわけでございます。

さて、少し時間が押しておりますので、この War Guilt Information Program というものがどう影響を戦後教育に与えたかということについてお話をしたいと思います。

その1つは、ミラン・クンデラという人が大変興味深いことを書いており

ます。これは『笑いと忘却の書』（集英社）という本にそのことが書かれてるのでございますが、1国の人々を抹殺するためには、その国の歴史を消し去って新しい歴史を發明すればよいという趣旨のことを言ってるんです。それは別に日本の占領のことを書いたわけじゃないんですが、まさに一国の人々を、その国の歴史を忘れさせるためには新しい歴史を發明すればよいということは、『太平洋戦争史』に当てはまるわけであります。大東亜戦争という歴史を消し去って太平洋戦争という新しい歴史を發明すれば、その国の歴史と文化を忘れ始めるだろうと。まさにその予言通り、戦後の日本人は忘れ始めたわけであります。

あるいは尾崎一雄という人が新潮文庫から出した『虫のいろいろ』という小説がありまして、その中に「蚤の曲芸」という話が出てきます。私はこれを読んだときに、これは占領政策と関係があると思ったのでここで紹介します。

ノミを小さな丸いガラスの玉の中に入れるんです。ノミはガラスの玉の中で得意の足で跳ね回ります。しかし周囲は硬いガラスの壁ですから、幾ら頑張ってもそれ以上高くは飛ばません。そのうちノミは跳ねることに絶望して、やがてガラスの玉の中だけが自分の世界だと勘違いをして飛ぶのをやめてしまします。そうなったところで曲芸師はノミをガラスの玉から取り出して、そして曲芸を教える。しかし自由の世界を与えられても、ノミはもう飛ばうとはしない。飛ぶことを忘れてしまった。曲芸師は飛ばなくなったノミに芸を仕込んで舞台に出す。

私はこれが戦後起きたんではないかと思っています。『新教育指針』という教師用の指導用マニュアルにも日本人の国民性に問題があったんだということが詳しく書かれました。まず、日本国民が日本国民の国民性に対する謝罪から始めなければならないというようなことがこの教師用指導マニュアルに書いてある。そして中学校の歴史教科書の近代史の扉には、これは2つの教科書にあったんですけども、中学校の教科書で「反日義兵」すなわち、日本に銃口を向けている朝鮮人の写真が日本の近代史の扉の写真になっている。

そしてその下には地球儀の上にふんぞり返った昭和天皇が軍服を着て偉そうにしている姿が出ている。その反日義兵の写真と昭和天皇が地球儀の上でふんぞり返って威張っている写真は何を意味しているか。それは、まさにコミンテルン史観、日清・日露戦争を含めて、あの戦争の原因は天皇を中心とした、天皇制絶対主義があるんだという考え方がコミンテルン史観ですけど、それが天皇が地球儀にふんぞり返っているということに集約されている。韓国や北朝鮮の教科書が反日義兵の写真を載せてるのであれば私は何の問題もあるとは思いません。しかし、日本の子どもたちが学ぶ日本の中学校の教科書が、日本に銃口を向けてる写真が近代史の扉の写真に出るとするのは、これはいかにもおかしい。

その War Guilt Information Program というものを継承し発展させようとする人たちが、今、日本学術会議の歴史分科会の主要メンバーになっている。私は『正論』という産経新聞の月刊誌に今の教科書がどんなに歪んだものになってるかを書いております。フェミニズムや、あるいは先ほど申し上げたコミンテルン史観というものが影響を与えているか。War Guilt Information Program については、この日本学術会議系の学者たちは陰謀史観だと言っています。War Guilt Information Program は陰謀史観に過ぎないという批判が左派の論壇では渦巻いております。

このことに明確に反論されたのは有馬哲夫先生。早稲田大学の教授でございますが、今はラムザイヤー教授のことが大きな議論になっておりまして、これについて彼がいろいろと発信したら、「早稲田大学を辞めろ」と、「早稲田大学教授の資格はない」というような、そういう声が大きく出てくるような時代にもなっていますが、彼が明確にこのことについて反論をしています。

例えば加茂道子という方が、『ウォー・ギルト・プログラム』という本を法政大学出版局から出して、この War Guilt Information Program に対する反論をしているんですが、問題点はこういう点だというふうに有馬さんは反論しています。第1に、War Guilt は戦争を起こした罪、戦争責任という意味なのに、戦争の有罪性というふうに解釈し、東京経済大学の有山元教授

から加茂さんに伝わるうちに突然変異を起こして意味不明のものになってしまったと。第2番目に War Guilt Information Program の第3段階は実施されなかったので、War Guilt Information Program は一般の日本人に戦争責任を感じさせる上で効き目がなかったと述べているが、当時のラジオ放送を検証すると明らかに実施されていて、加茂さんが言ってることは間違っているということは議論の余地がないと言っています。あるいは第3に、War Guilt Information Program は日本民主化政策の一環で、民主主義の啓蒙（けいもう）活動だったと主張しているが、War Guilt Information Program 文書は、このプログラムの目的は日本人が極東国際軍事法廷の判決を受け入れる心の準備をさせることだと明記しており、War Guilt Information Program 文書自体が反証になっていると。第一次資料の裏付けのない思い込みで、占領史について十分な知識を持たないために、自分が War Guilt Information Program マインドセットに陥ってることに気付いていないと批判をしています。第4に、朝日新聞がこの加茂道子さんの本に好意的な評価を与えているのは、War Guilt Information Program の効き目はそれほどなかった、あれは意識改革だった、いや、啓蒙だったとする説が、ずぬけて War Guilt Information Program に協力的だった朝日新聞の免罪符になっているからであると、こういう批判をしています。

さらに、加茂さんの近著『GHQは日本人の戦争観を変えたか』についても、先行研究を踏まえておらず、「研究理論上きわめて大きな問題がある」と痛烈に批判している。詳しくは、文末の参考文献を参照されたい。

War Guilt Information Program の実証的な研究をもっとしっかりしてほしい。私がヴァッサー大学やサセックス大学でベネディクト文書やゴラー文書や太平洋問題調査会の文書で今日ここで述べてきたようなことについて、きちっとその文書を読んで反論するならいいんですけども、そういうことを、その文書に基づいて反論をしないで陰謀史観のようなレッテルを貼るのは心外である。もちろん大いに議論する余地はあるでしょうから大いに議論すればいいと思いますけれども、ぜひ実証的な緻密な研究に基づいて建設的な議

論をしたいものだと思っております。

さて、もう時間がほぼ予定の時刻になっておりますのでまとめていかなければならないんですが、最後に今、西岡力先生と私は歴史認識問題研究会をつくっております。ここで研究誌を年に2回出しております。『歴史認識問題研究』、ぜひ皆さん、インターネットで「歴史認識問題研究」、「歴史認識問題研究会」と検索してもらおうと、第11号まで出ております。ここに詳細な実証論文を書いておりますので読んでいただきたい。

特に教科書誤報事件で、「中国華北への侵略」を「進出」に書き換えさせたという事実は実際にはなかった。日本テレビの記者が文部省記者クラブの勉強会でそういう報告をしてしまったために、全てのマスコミがあたかも教科書で「中国華北への侵略」という教科書記述を文部省検定で「進出」に書き換えさせたというように報じてしまったんですが、これが中国の反発を呼んで、近隣諸国条項という教科書検定基準に「アジアの近隣諸国に配慮する」という条項が入った原因なんです。もともとそういう教科書の検定はなかった。そういう事実はなかったんです。これは現在でも謎であります。なぜこんな誤った報告を日本テレビの記者が文部省記者クラブでしてしまったのか。当時、渡部昇一さんが「萬犬虚に吠える」と題して、『諸君!』や『文藝春秋』等で論文を発表されました。私も『諸君!』の巻頭論文等でこの問題について大いに論じました。

次に、首相の靖国参拝問題。これももともと、首相が靖国神社を参拝することは全く問題になりませんでした。これが問題になったのは、日本のマスコミがこのことを取り上げるようになってからであります。これもマッチポンプ式に日本が火を付けて、「中国や韓国が問題視してではないか」と言って問題視するという、こういう図式になった。

「従軍慰安婦」問題も同じであります。『War Guilt Information Program』と『歴史戦』という本の中で、私がユネスコの「世界の記憶」という、中韓が中心になって「南京大虐殺」といわゆる「従軍慰安婦」について申請された文書についてどういう意見書を書き、どういうことを国際発信してきたかという

ことは明らかにしております。そしてアブダビで開催された国際諮問委員会のオブザーブをさせていただいて、このままでは日本の名誉は守れないということを感じました。これまでは外野席から外務省に対してやじを飛ばしていました。「何やってんだ」と言って外野席からやじを飛ばしていましたが、それでは日本の名誉は守れないということにアブダビの「世界の記憶」国際諮問委員会に出て気付いたんです。私たち民間人が内野に下りて外務省と一緒に守備に就かないと、官民一体で日本の名誉を守らないと日本の名誉は守れないということに気づいたのです。

私はこのアブダビの会議に出る前にフランスのパリの国連本部に行きました。そして外務省の担当責任者とお話をしました。いわゆる南京大虐殺について、「ジェノサイドのような、ああいうものはなかったということをちゃんと主張しないといけないじゃないか」、「反論しないといけないじゃないか」ということを申し上げたんですが、大変クールな対応でした。「先生、外務省のQ&Aをご覧になりましたか」と。「日本政府は20万、30万という虐殺は認めてないけれども虐殺があったということは認めているんですから、個々の反論をしても、それは説得力はないんじゃないでしょうか」というような言いぶりでした。「そのジェノサイドのような虐殺がなかったということに対する明確な反論をする必要があるのであって、その視点での国際発信が外務省は不十分だ」ということを申し上げたんですが、あまり聞く耳持たなかったのので、私はこれは官民一体チームを作ってできちっとした対応を取らないと駄目だということを感じました。

この問題は今日では韓国にも広がっておりまして、事実無根の反日キャンペーンが国際社会に広がってまして、韓国では戦時労働者と慰安婦への賠償を命じる国際法違反判決が相次いだ上に、文在寅政権が司法の独立などという詭弁（きべん）を弄（ろう）して国内での解決をしないで日韓関係は最悪になりました。

中国も反日キャンペーンを続けて、「世界の記憶」に中国政府が申請した「南京大虐殺文書」が登録されました。これは今、公開されています。全20巻で

出版もされています。しかし、それを今、私たち検証しておりますが、そしてその分析結果は先ほど申し上げた『歴史認識問題研究』で、若手の長谷という、この南京虐殺問題で博士号を取った若手の学者が今、研究しております。

そして国家基本問題研究所という櫻井よしこさんが理事長をされている、私はその理事をしておりますが、この国家基本問題研究所が平成28年1月に「歴史認識に関する国際広報体制を構築せよ」という提言を行いました。一部その提言が実現したところと実現しなかったところがありまして、そのことについて、今、私たちは新しい提言をまとめております。

その提言はどういうものかということを最後に述べて締めくくりたいと思うんですけども、国家基本問題研究所が提言をしたのは、まず政策提言、「歴史認識に関する国際広報体制を構築せよ」という提言でございました。第1は「事実関係に踏み込んだ体系的歴史認識の国際広報」を、政府が担当する専門部署を外務省とは独立した形で設置し、わが国の立場を正当に打ち出す国際広報を継続して行くべきだと。第2に、国会は、事実無根の反日キャンペーンへの反論を政府の任務とする仮称「わが国の名誉を守るための特別法」を制定するべきだ。

第3に、国際的反論を行ってきた民間専門家がより一層、活発に行動できるように、国際広報における官民協力体制を築くべきである。

今申し上げた1番と3番はある程度実現しましたが、わが国の名誉を守るための特別法を制定するということは全く実現しておりません。第二次安倍政権の下で、内閣官房にある外政担当の副長官補室が他国との摩擦など省庁横断の案件として歴史問題を担当しました。また歴史問題担当の首相補佐官を置いて、政治の立場から歴史問題を統括しました。兼原信克という前副長官補は、こう証言しています。外政担当副長官補の仕事になった歴史戦については、教科書を担当する文科省、旧軍兵士の遺骨問題を担当する厚生労働省、中国や韓国の歴史戦に関するプロパガンダに対処している外務省と複数の官庁が絡むので、外政担当の副長官補室、官房副長官補室チームで取りま

とめの調整を行っている。戦後70年を記念して発出された安倍総理談話策定のための有識者会合を差配したのも外政室である。慰安婦問題に関する官房長官談話策定過程の再検証をしたのも外政室であると。これは兼原さんが書いた『安全保障戦略』で発表されています。

ここで兼原氏が「外政担当副長官補の仕事になった歴史戦」と書いている点に注目したいと思います。つまり、第二次安倍政権になって歴史戦が内閣官房の副長官室の仕事になったのであります。日本経済新聞、平成29年8月17日付は、「内閣官房の研究」という連載記事でそのメリットについて次のように書いています。中韓との摩擦への対抗、対応は本来、外務省の担当部局の仕事だ。だが外務省幹部は、担当者は目の前の相手との協調を優先しがちだと明かす。摩擦対処の役割を副長官室に移したことで、主張すべきことはしながら良い環境を築く外交はしやすくなったと。

また、慰安婦問題についても次のような激しい動きがあり、官民協力体制が進展しました。米国で在米韓国人、中国人の反日団体より各地に慰安婦像や碑がつくられています。私は全ての慰安婦碑、慰安婦像を現地で調べて写真も撮り、取材もし、インタビューも行ってきました。2014年に、在米日本人有志がグレンデル市慰安婦像撤去を求める訴訟を起こしました。産経新聞がその動きを大きく報じたことにより、日本でもその動きを支援する活動が活発化しました。残念ながら裁判は敗訴し慰安婦像撤去は実現していませんが、2017年2月、政府がアメリカ連邦裁判所に有志らの主張をサポートする意見書を提出しました。

また、国連でも慰安婦問題を巡り激しい攻防が続いています。日韓の反日勢力は1992年から慰安婦性奴隷説を国連の人権委員会に持ち込み、クマラスワミ報告とマクドゥーガル報告にそれぞれ明記されてしまいました。それに対して、2010年代に入ってわが国の真実を追求する民間団体が国連への働き掛けを始めました。2015年に、国連女子差別撤廃委員会で山本優美子さん、杉田水脈さんらが慰安婦強制連行は事実ではないとスピーチをし、それを受けて同委員会が日本政府にその点を質問しました。政府は国連女子差別撤廃

委員会で杉山審議官が慰安婦問題で強制連行、性奴隷、20万人説に明確に反論しました。

また、ユネスコの「世界の記憶」に南京資料が登録されてしまい、2016年に日韓中などの反日団体が慰安婦文書の登録申請をしました。それに危機感を抱いた政府は、民間の学者らのアドバイスを受けつつユネスコへの精力的な働き掛けを行う中、2017年に慰安婦登録が保留になって、今、ユネスコから対話勧告を受けています。

私たちは「世界の記憶」の制度を変えるべきだという戦略を立てました。アブダビの会議に出て、この「世界の記憶」遺産を審議してる人たちは歴史の専門家ではなくて文書管理の専門家であるということが分かりました。つまり国立国会図書館の館長とか、国立公文書館の館長とか、こういう人たちが議論してるんです。そういう人たちには歴史が事実であるかどうかという文書を見せるよりも、これが公文書として問題がないかどうかという、文書管理の観点からの問題点を指摘するほうが説得力があるということが分かったんです。

そこで私はその観点から、共同文書の分類の問題点とか文書の具体的な問題点を、そういう制度改善の立場から意見書を3回提出しました。そして、そういう制度改善を進めた結果、この慰安婦の問題については対話をしようということになったというのが大きな進展でございます。

国際倫理とか国際規範の構築を目指す必要がある。ナショナリズムはそれぞれの国の立場で意見が対立します。しかし国際基準、国際倫理という観点で文書管理の観点から、横井小楠が指摘した「天地の公理」という観点から歴史戦を展開すべきだと思っています。

そして最後に、ユネスコの創立60周年記念国際シンポジウムの最終公式声明にはこう書いてあります。「対話とは、思考のプロセスを再考し、確信されてきたものを再吟味し、新たなものを発見しつつ前進する手段であり、対話とは対決であり、試練であり、変容であり、通底する価値に身を投じるための手段である」と。ここで「和して同ぜず」の和の精神が引用されていて、

日本の和の精神というのは、「異なるものの調和を意味」として「対話のための理想的な場としての『道』」の文化の意義が強調されています。

日本の教育界では今、対話ということが盛んに強調されていますけれども、「対話とは対決であり試練であり変容である」と。これはなかなか鋭い指摘だと私は思っております。この歴史認識問題というものは、これから歴史戦で私たちがより説得力のある国際倫理、国際規範の支持を得るかという勝負になると思っております。私はユネスコへの意見書の中で、慰安婦像というものは平和のシンボルだと申請した人たちは書きましたが、そうではないと訴えました。慰安婦碑ができたことによってアメリカの各地で日本の在米日系人の子弟がいじめを受けている。これは紛争のシンボルになってるんだと。平和のシンボルじゃなくて紛争のシンボルになっている。ユネスコはその憲章の前文で、まず人間の心の中に平和のとりでを築かねばならないと書いている。まず心の中に平和のとりでを築くことが実は平和というものにつながっていく。ならば、慰安婦像というものはかえって紛争のもとになっているんだから、これは平和に反すると。これが国際規範、国際倫理に基づく平和という基準から見た観点でございまして、そういう天地の公理に基づいて反論すれば、今までの国家間のナショナリズムの対立を超えた議論ができるんじゃないか。私たちは国際倫理、国際規範という新しい観点から国際的な歴史戦をすべきところに来ているということを最後に申し上げて、もう1時間半になりましたので、これで終わらせていただきます。

補足しますと、今日の資料の中で時間の都合でカットしたところで、8番のところが何が言いたかったかということだけ、ポイントだけお話ししたいと思います。それは、War Guilt Information Program の中で日本精神の三本柱として否定された内容は、今日は再評価されているということについてお話をしたいんです。

例えば神道というものは伝統的な軍国主義だとレッテルをされましたが、今日、国連事務総長から石清水八幡宮の権宮司が「SDGs 文化推進委員長」就任を依頼されました。その理由を石清水八幡宮の権宮司が書いている文章が

ありまして、端的に言えば、SDGsには哲学が足りない。それで、日本の神道の哲学で補ってほしいという趣旨のことを頼まれたというんです。現代において世界中の人たちが求めている本質的な価値は日本の哲学であり、それは世界と共有が可能です。神道的な概念というのは日本独自のものではなくて世界中の人たちが共感できるものです。世界の国々と通じ合っていくことができます。こう答えています。

それから武士道についてはぜひ皆さんにこの本を読んでもらいたいです。『高校生が読んでいる「武士道」』（角川新書）っていう本です。開成高生、開成中生が、武士道を学んでるんです。授業で。現代の高校生、開成高生はどういうふう感じたかということが書いてありまして、代表的な感想だけ読ませていただきます。「今この書に出会い、僕の血の中にあらがうことのできない日本人固有の伝統精神が生きてることを誇りに思う。日本人の原点回帰の書として覚えておきたい。」今の高校生が日本人原点回帰の書と書いているわけです。

あるいは、「日本の古来の伝統や歴史文化、精神をもう一度見直す時期にしているのではないだろうか。自国の伝統や脈々と受け継がれてきた精神を知らずに世界の第一線に出ていくことは恥ずかしいことだ。武士道にはこれまで培われてきた日本人の精神の全てが詰まっている。これは日本人が日本人としての誇りを取り戻し、世界に胸を張って出ていくための必読の書だと思った。僕は誇りある日本人の一人として、武士道の言う名誉の掟を精いっぱい守りたいと思う。己を律すること、厳しく、どんな逆境の中でも自らの誇りと使命感を失わず、模範的姿勢を示す強い精神の持ち主でありたい。日本人は武士道にある克己（己に勝つこと）を忘れることなく、新たな伝統を打ち立てなければならない時期に来ていると思う。それによって国際社会での日本の立場を築いていけると信じている。」

これは70年たって、武士道というものがWar Guilt Information Programの中では否定されましたが、現代の若者たちの中では十分に心の中によみがえっているということを物語っている。

最後に皇道についてですが、これは私が産経新聞に詳しく書いておりました、「解答乱麻」というコラムを私が定期的に書いていたんですが、2019年2月6日付の産経新聞にこのことについて詳しく書いております。それは、歴代天皇は何を大事にされてきたか。それは、ポイントを一言で言えば公議、すなわち公の議論と民意を大事にする、この2つなんだと。それは五か条の御誓文、あるいは聖徳太子の十七条憲法、あるいは終戦の詔書にも明記されている。公議と民意を重視するという、これが歴代天皇が受け継がれてきた「皇道」であり「国柱」の精神に他ならない。

参考文献

- (1) 拙稿「WGIP『陰謀史観』を論破した有馬哲夫の実証的反論」
(モラロジー道徳教育財団「道徳サロン」高橋史朗連載20, 令和2年)
- (2) 有馬哲夫『日本人はなぜ自虐的になったのか—占領とWGIP』(新潮新書, 令和2年)並びに同書を書評した拙稿(『歴史認識問題研究』第7号, 同)
- (3) 有馬哲夫「書評・賀茂道子著『GHQは日本人の戦争観を変えたか』」
(『歴史認識問題研究』第11号, 令和4年)